

## □ 声 楽

## 國 土 潤 一

2020年は、56年ぶりに東京でオリンピックが開催されるはずだった。年が明けた頃は、例年のように多くの外国人観光客が東京を始めとする全国各地に見られた。1月末に文化庁の仕事で出張した北海道釧路市でも、「ここは日本か?」と思うほどに中国人観光客であふれかえっていた。中国武漢市で見つかった新型コロナウイルス(COVID-19)は、まだどこか他人事のように感じていた。

2月末のクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」での集団感染の発症あたりから、嫌な実感が国民の間にじわじわ広がり始めたのではないだろうか?

2月6日に、バリトンのディートリヒ・ヘンシェルが、岡原慎也と共にシューベルトの歌曲集「美しき水車小屋の娘」でリサイタルを開いた。一世を風靡した名バリトン、ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウの門下生として、かつてアンドレアス・シュミット、マティアス・ゲルネラと並んで華々しく登場したヘンシェルだった。ここに更にトーマス・クヴァストホフ、シュテファン・ゲンツ、クリスティアン・ゲルハーエル、ローマン・トレーケルといった「ポスト・F＝ディースカウ」の名バリトンが百花繚乱、覇を競った20世紀終盤から21世紀初頭を経て、ドイツ・リートの世界は現在どんな状況か? 残念ながら些か尻すぼみの状況のように感じられる。これは、日本国内でも同様で、往時よりドイツ・リートのリサイタルの数は少なくなっているのではないだろうか?

ヘンシェルに話を戻すと、かつての端正な発声フォームは全く見失われてしまっていた。歌おうとする世界を具現するテクニクが、すっかり崩れてしまっている。声楽家が、小さな誤差から発声フォームを見失って行く例は枚挙に暇がないが、ヘンシェルも同様の状況に陥っているようであった。岡原慎也のサポートが見事だっただけに、これは残念だった。日本人声楽家が海外での活動から、拠点を日本に移してから、その歌唱内容が劣化する例は多いが、ヘンシェルの「劣化」を目の当たりにして、改めて声楽家が状態を保つ難しさを思わされた。

そうこうするうちに、オリンピックの延期、緊急事態宣言の発令、多くの演奏会の延期・中止が始まり、6月までの筆者の手帳は、赤ペンで予定を塗り潰した記載だらけになった。7月に入り、少しずつ演奏会が再開され始めたが、ソーシャルディスタンスをはかりながら、演奏者同士の握手や聴衆の歓声も無い「コロナ下でのマナー」が試みられた。

9月19日に、やな音楽ホールで前田佳世子歌曲作品だけのコンサートが、メッツォ・ソプラノの佐藤寛子によって開かれた。前田佳世子は東京藝術大学作曲科を卒業後、二期会、東京室内歌劇場、東京藝術大学オペラ講座などでオペラ・コーチを長く務めながら、声楽作品の作曲にも近年は力を注いでいる。多くの声楽演奏の現場での経験が反映されたその作品は、多くの声楽家のレパートリーになっている。そんな前田の作品ばかりで構成されたプログラムを、「シュガーシスターズ」という姉のソプラノ、佐藤容子と組んで活動している佐藤寛子が鈴木真貴子のピアノと共に披露した。小さな会場に、更に入場者制

限を行っての開催であったが、生の歌声を久しぶりに聴けた聴衆と、そんな聴衆を前に演奏できる演奏者の喜びが合わさり、温かくインテームな時空が現出した。前田作品の温もりがしみじみと感じられた。

8月8日、テノールの山本耕平のリサイタル(東京文化会館小ホール)や、9月12日のバリトンの榎貴志のリサイタル(浜離宮朝日ホール)は都合がつかず聴けなかったが、11月27日にハクジュホールで行われたテノールの山本康寛のリサイタルは聴けた。これらは、東急グループが行っている「五島記念文化賞オペラ新人賞研修成果発表」の一環であり、9月5日にはかつしかシンフォニーヒルズで行われた指揮・コレペイトウールの分野で研修していたキハラ良尚の研修成果発表も聴いた。

オペラにおけるコレペイトウールの重要性は改めて述べるまでもないはずだが、実際の現場での「コーチング」の実態を思うと、現実はなかなか厳しい状況ではないだろうか。キハラ良尚は、その将来を大いに嘱望される存在であろう。「オペラ新人賞」は、先物買いの未来予測の博打の側面を持つが、キハラ良尚には大いに期待したい。

山本康寛に話を戻そう。「びわ湖ホール4大テノール」の一員として人気・実力共に絶大な山本が、指揮者の園田隆一郎のピアノで、ロッシーニ、ベッリーニ、ドニゼッティに、アダン、ボワエルデューというフランス作品を加えた「ベル・カント作品」ばかりで組み上げたプログラム。レジュエーロのテノールの醍醐味とも呼ぶべきハイC、ハイCisがこれでもかと頻発する選曲は、日本人テノールだけでなく、世界中でもそれほど多くない歌手だけが組める難易度の高い内容。ここで聴かれた内容は、「遂に日本人テノール歌手がここまで来たか!」という感慨を抱くと共に、「アスリート」としての「ベル・カント・テノール」としては、更なる完成度の研磨が求められるように感じられた。この課題を如何に克服するかが、次のテーマとなるだろう。共演の園田隆一郎、ソプラノの光岡暁恵が、充実した演奏を示し、綿上花を添えた。東急を始めとする企業のメセナ活動へも、改めて敬意と感謝を送りたい。

時期は前後するが、11月21日にバリトンの吉江忠男が小林道夫とシューベルトばかりのプログラムでリサイタルを開いた(サントリーホール・ブルーローズ)。1975年から12年間、フランクフルト市立歌劇場の専属歌手を務め、帰国後は郷里の長野県岡谷市でのカノラ・ホールの名誉館長も務めた吉江が、聴くところによると亡くなった佐藤しのぶとのジョイント・リサイタルを計画していたという。佐藤の急逝によって改めてソロ・リサイタルとして仕切り直しての本番で、吉江が80歳、小林道夫が87歳という、ギネス級のリサイタル。勿論、加齢による様々なアクセントはあったが、ソット・ヴォーチェを多用した柔らかい表現は、その年輪の蓄積を改めて感じさせてくれるものだった。「コロナ・ウイルス禍」の「憂さ」を吹き飛ばしてくれるようなこの2人の音楽に、改めて音楽が我々に与えてくれるものの意義について考えさせてくれた。

大晦日に東京都では一日のコロナ感染者が1000人を越え、1月8日には東京都と神奈川、千葉、埼玉の3県に1か月の緊急事態宣言が発令された。2021年の音楽界がどうなるのか予断を許さない中で、この原稿を書いている。この「コロナ禍」は、改めて音楽の意味と意義を教えてくれた。1年後、どんな日常になっているかはわからないが、良き日々が回復しているのを祈らずにはられない。